

## 殿 中 問 答

### 一

「日蓮法師は明日、殿中に参上するとの返事であるか」

「さようでございます」

家司の平左衛門尉頼綱が答えた。

時宗は言葉をつづけた。

「あの、日蓮法師が、父時頼入道殿に、南条左衛門の手をへて面会申したのが、今を去る十四、五年前（註一）ときいておるが、その時より、他国侵逼の難ということを申しておったとか、それが蒙古襲来ということになるうとは……」

左衛門尉頼綱は、時宗の言葉をうけると、返事のような、また独りごとのような言葉をつづけた。

「私も念仏の一門徒、文応元年より、彼を目の仇として、まず手始めは、日蓮法師が立正安国論を故最明寺入道殿（時頼のこと）に献上した日より忘れもしない四十一日目の八月二十七日に、手勢三千人をもつて、夜打ちをかけましたが、火遁の術でも、心得ておったか、彼の法師は無事に逃がれてしまいました。不思議な法師でございます。殿にはまだその時は僅か十歳の御時ですから、御記憶はうすいと存じますが如何でございますようか……」

「……………」

子供扱いにされても、時宗はいかんともすることが出来ない、だから時宗は子供の時分から、此の家司の言うことは一応は、だまつてきくことにしていた。この頼綱は前にもふれたことがあるが、時宗の父時頼、時宗の長男貞時と、三代三十余年家司の職をさらず、遂には我が子を將軍に立てようとの野望を抱き、その陰謀露顕して、父子もろとも殺されたのが、宗祖滅後十二年の永仁元年四月二十二日のことであつた。

さて、北条一門において、危うくは執権職をもしのぐ頼綱の言葉に、彼がなにを言い出すか時宗にとつては、だまつてきいておる方が得であつた。

文永十一年の三月七日、処はたそがれどきの、時宗の書院である。

雨を催すのか、落花した桜の花びらをしきつめた池の面に、時々、鯉のとびあがる音が、静かな宵の沈黙しじまを破るのだった。

頼綱にしてみれば、今年二十四歳の時宗は、執権職には違いないが、十五年も家司をつとめて  
いる自分からみれば、まだまだの感があつたのはやむを得なかつた。

「伊豆の伊東に三か年の流罪を申しつけられて、もはや、幕政に口を閉じるかと思ひました彼の  
法師は、却つて逆となり、愈々蒙古襲来を唱えて人心を攪乱いたしますので、遂に竜の口に斬  
首しようとしたのに……」

「頼綱、この時宗はいつも十歳ではおらんで、十八歳にして執権職となり、本年は二十四歳じゃ、  
政道の曲非ぐらひは心得ておるぞ」

頼綱が如何に年齢を重ねたことを誇つてみても家司は家司即ち執事であつて、最後の決定は執  
権職にあることを時宗は十分にわきまえていたのである。但し時宗にも弱点はあつた。それは自  
分の母であつた。母は極楽寺を建てた北条重時の娘であつたので、極楽寺の良観がその辺のこつ  
をよく心得ていて、こと日蓮法師に關しては、決して幕府を通さずに、じきじきに母親に訴えて  
いた。今鎌倉の生き仏と言われる良観に、涙をみせて訴えられると時宗の母親は理性を全く失つ  
て、時宗が、出した命令さえ、とり消しをせまるのであつた。

時宗が、文永八年九月十三日、大聖人に対して、直々に「この人はとがなき人なり、追つて許  
るさるべき人である。特に叮重にせよ」との直筆を、大聖人滞在の、依智の里に送つたことがあ  
るが、これも、良観の運動が、時宗の母親や、直接その役にあつた、武蔵守宣時（佐渡の領

主)等の心を動かして、大聖人は、佐渡の島の流罪に、約二十日間後にとうとう決定したのである。母親には、頼綱以上に、時宗が子供にみえ、自分の意のままに時宗は動く、また動かさねば、念仏がつぶれるとも思っていたのである。

然しながら、今時宗と対談をしている、頼綱はその胸中文永八年の竜の口の時とは、天地雲泥の相違があった。

というのが、頼綱も亦竜の口の経験者であった。太刀とり依智の三郎が倒れ臥すのも、この眼でみたのであった。不甲斐なくも、自分自身も、あの大変動に驚ろいて、四、五丁ばかり、馬もろとも思わず逃げだったのであった。それに呼応するが如く、殿中より首きるなどの命令に接したのである、実に不思議と言わざるを得ないのが、日蓮法師である。

日蓮法師の不思議はまだそれだけではなかった。自界叛逆の難は、日蓮法師を佐渡に流がして目百五十余日目で、鎌倉と京都に起きた。また、頼綱は、佐渡の領主宣時が、良観に泣きつかれて、私の御教書を三度も下して日蓮法師の命をうばおうとしたことも知っていた。だが、三度目の偽の御教書は、不思議な法師日蓮にその写しが何処をどう通ったのかその手に入ってしまった、最後は日蓮法師の鎌倉の檀徒にその偽御教書の写が到着したからたまらない。以前から、大聖人の赦免運動は鎌倉にもあったのであるが、それは大聖人からさしとめられていたのである。それが、今度は当然となった。立正安国論を文応元年に献上した時の寺社奉行であった宿屋左衛門も

この時分には最早強信者となっていた。また北条時宗の大叔父にあたるという北条弥源太も佐渡の大聖人に文永十一年に立派な刀二振をおくつて、「殿のおもちの時は悪の刀、今仏前へまいりぬれば善の刀なるべし」（註二）との御返事をいただいておる程の信者である。そのほか、富木、太田、曾谷、四条、池上、南条等の幕府に相当の位置をしめる武士の信者達がいた。この人たちが、大聖人の激励によつて、偽御教書を示されて奮起したのが、功を奏して、文永十一年二月十六日の佐渡の赦免状となつたのである。だが、このことは、頼綱にとつてまだまだ驚ろくべきことではなかつた。実はもつと恐ろしいことが頼綱の胸をうつたのであつた。

ものごとは突然起こるように見えるが、実はそうではない。遠因、近因があり、一つのことも起こるべくして起こるので、さぐつてゆけば根深いものである。浜辺に松の樹を植えて十年たつても一向にのびぬので、研究してみたたら、松の木はけつして砂に根をはるのではなくて、砂の層を通り越して地層に到して、その地層にしっかりと根をはつて、それからようやく砂上の木が伸びるといふことで、砂の層をつきぬける迄は二十年もかかつたと言ふ例もあるくらいである。地上だけの松の木をみておれば二十年間のびもしなければ太くもならない貧弱な松の木であるが、実はどうして、みえないところでは必死の苦勞をしておる松の木である。

余談はさておき、頼綱の大聖人に対して一番の恐怖を感じたことは、聽ては自分が北条の天下を狙うと心中ひそかに期することがあったからである。文永十一年から丁度二十年後の永仁元年頼綱はその野望のために殺害されて相果てたが、今はその結果は眼にみえずただ野望に身をこがす時代であった。

その頼綱が、明日は大聖人を殿中にむかえて、厚遇をもつて接し、頼綱が不思議な法師とする大聖人から、きいてみたいことがあるのである。だが、四年前には、その大聖人を裸馬にのせて、鎌倉中を引き廻わしたのは、この自分であった。なんとという変り方であろう。ききたい前に、頼綱が気になってしょうがないことがある。

それは大聖人が、文永十一年正月二十三日の申（午前四―五時）の時に、西の方に二の日出たことを佐渡の国の人が大聖人に伝え、また、二月五日には東方に明星二つならび出て、その中間三寸ばかりであったと言うことをきいて、これは、二つの並び出るとは、一国に二人の国王がならぶ相である。王と王との鬭諍である。星の月日をおかすのは臣が王を犯かす相である。日と日と競出づるは、四天下一同の諍論である。

明星ならびに出づるは太子と太子との争いであると予言されたことであった。（註三）

この大聖人の予言は、脛すねに傷もつ頼綱にとつては、驚天動地の言葉であった。家司の役目を務めて、二十年になんなんとしている。蒙古襲来をよいことにして、九州、四国、中国等々の守護

地頭は、殆ど頼綱の手で首をすげかえて、既に天下の大勢を、二十四歳の執権職時宗などの手の及ばぬところにおいておる頼綱であった。だから、天下を動かす予言をするような妖僧と正式に逢つてみたかったのである。

時宗自身は頼綱とは全く逆であつた。大聖人を偉徳のある傑僧として遇し、まずそのよつてきたる法華經の法話を伺い、そして十四、五年も蒙古襲来を唱えつづけその為に、一生を台なしにした僧侶、然し蒙古は現に使を四、五度もよこしておる。蒙古襲来は事実となつたのだ。始めは蒙古襲来を言っただけで、人心攪乱罪で伊豆の伊東に流がされた。その生活も苦にせず、今もつて叫びつづけておる。これは、我が身のために、或いは栄達のためにのみ蒙古襲来を唱えておるのではないことがわかつたのである。

それに引きかえて、何故、念禪真言律等にも世の尊敬をうける僧侶大徳が、鎌倉中に沢山いるのに、蒙古襲来を口にしないのだろう。同じく仏法を学びながら蒙古については使が何度もきておるのに、蒙古襲来をなぜ日蓮法師のように叫ばないのだろう。不思議だ。念禪真言律等の宗旨の僧侶に、こぞつて日蓮法師を仇敵とするが、蒙古襲来を一言も口に出さない。こんなこの世の中の大事な出来ごとに、わざと眼をそむけて、念仏さえ唱えておればよいというような宗教が、国民全部が国難来におびえておる今の世にあつてよいものだろうか……

時宗は思わず膝を叩いた。

頼綱は自分の心中をみぬかれたかと思つて、びつくりすると、

「殿、なんでございますか……」

と問うたが、時宗はその声を無視して沈黙を守つていた。何時の間にやら、部屋には灯がはいつて、みがかれた床ゆかの上に、一畳の台座に正座した、青年宰相の姿をうつしていた。

時宗は、かすかな微笑を面に浮かべていた。頼綱は自分の心中を顧りみて、言葉をかけるのをやめた。

時宗の膝を叩いたのは頼綱の心中を押しはかつてのことではなかった。自分の政治に関する批判をやつて苦笑をしたのであつた。時宗が執権職となつたのが、文永五年の三月五日であつたが、四月には日本中の社寺に蒙古調伏を祈らせた。そういうと簡単だが、神社でも寺でも、けつして只で祈禱をしてくれるものではない。大きな神社には大きな寄進を大きな寺には過分な御布施をつつまなければならぬ、仏家では布施なき経よむべからずの掟さえあると云うではないか。蒙古襲来の声が強くなると何時でも、全国の社寺に御寄進申すのは、時宗自身であつた。すると、この不安定な世の中で、一番安心して飯を食つておる人間と言へば、蒙古襲来の祈禱をたのまれてお経をよみ、祝詞のりとを上げておる人々ではないか、鎌倉を例にしてみても、はつきりとわ



かることである。道端に埃ほこりにまみれてふだんは誰も気にしない祠ほこらでさえ、蒙古調伏の祈禱令が發布されると、ちゃんときれいに花が供えられ、供物が上げられている。そして御祈禱料が当然のように催促されているのである。

大きな寺ではその御祈禱料がたまって、利子をとって金貸しさえしておるのがあり、妻子をかまくまうなどは当然のこととなっていた。かくすは上人という言葉すらあるくらいである。僧侶の墮落はなにも鎌倉時代に始まったことではない。

遠く神龜天平の時代からである。天平六年には太政官符をもつて、諸寺佛像経巻を穢きたないところ所に置き、風雨にさらすを禁じておる。俗に信は莊嚴より起こると言うから、これは僧侶に信心のないことを示した太政官である。僧侶で布施の二重どりをする者が多く、ひどいになると寺の住職をしないだけで、毎年正月の官供をうけとるもの、空名を二か寺にあげて、官供を食るものがあった。

また平安時代というと叡山や奈良の僧兵を思い出されるが、実は僧兵の兇暴は平安末期よりも、鎌倉時代に入って更に甚しかったのである。正倉院文書には月借錢の証文があるが、これは質をいれて銭を借りる、今で言えば質札のはしりというところである。貸主は寺院で、借主は写経生が多い。月百文につき十三文乃至十五文、一年に十五割六分或は十八割という高利で、その質物は布綿、衣服、家地、田或いは人身までもあった。それがついには在家にまで金を貸すよう

になった。

また俗人に、錢を貸して、妻子を養っていた奈良の僧某が、その娘の聶に錢を貸したが、その聶が、数年後、元金だけ返却して利子を支払わなかったので舅の僧某が利子の返却をせまった処が、聶はそれを怒って、舅の僧某を、海になげいれてこれを殺そうとしたことなどがある。(註四)

大安寺では修多羅分錢しゅたらかんせん、成実論分錢じやうじつろんぶんせんというのがあつて、これを貸してその利を計りまた菓王寺くわおうじ(勢多寺)には菓分酒くわぶんしゆというものがあつて、それを貸して利子をとつていた。このような寺の経営法は鎌倉時代にもうけつがれていたことは当然で、鎌倉時代になつて、ふえたものに寺のばくちばくちというものがあつた程である。

鎌倉でも、嘉禎元年(一一三三)鎌倉中僧侶の兵杖へいじやうを帯ぶることを禁じ(註四)、延応元年(一一三九)四月、僧侶が頭巾づきんをして鎌倉の街を歩くことを禁じ、仁治三年(一一四二)三月にも、鎌倉中の僧徒の帯剣を禁じ、刀剣を帯ぶるものは、見つけ次第にこれを抜きとつて長谷の大仏殿におさめさせてしまった。以上のように、度々命令が出たということは、その法令が、いく度、処々の貫主や別当に出しても行なわれなかつたことを証明するものである。

以上のように僧侶の墮落した時代である正嘉年中(正嘉は二年迄。大聖人は正嘉二年岩本実相寺にこもり、立正安国論執筆の年)に親鸞が門徒に示した二十一個条を善性が集録したと言われ、るものの中に、念仏門において十悪五惡に生きるを信知して小罪を犯さざること、人倫を売買し

て並に牛馬の口入を留むべきこと、他人の妻女懐抱をとどむべきこと、諸々の博奕、雙六をとどむべきこと、念仏勤行の日男女同座すべからざること、同じく勤行の日、魚鳥ならびに五辛食すべからざること、等々を戒めておるが、これは即ち念仏にかこつけて以上のようなことが、当然として行なわれていたことを示すものである。

時宗は当時の僧侶の墮落を考えたが、樹下石上をこととする僧侶に墮落はないだろうが、錦衣玉食に身をかためた僧にはそれがある。考えてみれば時宗がその墮落に片棒かついでいたのである。それは民の膏をしばりあつめて、仏前にともし、蒙古退散の御祈禱を願つたものは時宗自身ではないか、民の膏を半分だけ仏前にともし、いや三分の一をともし、懷中をこやしているのは鎌倉の僧侶であつた。鎌倉の僧侶を否な全国の神社の神官僧侶を墮落させたのは、蒙古退散の御祈禱をたのむ、この時宗ではないか。

青年宰相時宗の額には脂汗がにじみ出していた。結び灯台の灯りが、それを木彫のように浮び出していた。

日蓮法師は蒙古襲来を文応元年より叫びつづけて、伊東に、竜ノ口に、佐渡にと、苦難の道を歩みつづけて十五年。念禪真言律等、鎌倉に瓦をならべて、その大伽監を誇こる僧達はこの十五年間、国を患えている。言葉は一言ものべず、蒙古退散の祈禱料をたんまりためて、たらふくと食つておる。しかもそれは民の膏血ではないか、どちらが本当の僧侶であろうか。生き仏と人か

らあがめられる極楽寺の良観すら、時宗の母親になきついで種々と策を弄うし、遂には、武蔵守宣時の了解のもとに、偽の御教書を三度も出している。それもただ佐渡の国に流されたものは昔から帰ってきた例がない。よって日蓮を殺してしまえ、弥陀の仏敵を殺せよという合言葉にすぎなかった。

どちらが本当の僧侶であろうか、時宗は本当に迷った。念禪真言律宗の僧侶が真剣にものを考えるのならば、日蓮法師は立正安国論という論文を幕府にささげて、それより四箇の格言を唱え、蒙古襲来の国難を告げておるのである。単なる思いつきで唱えておるのではない。しかるに念禪真言律の諸宗の僧侶は、蒙古退治の祈禱料こそ懐中にたんまりいれることはしても、立正安国論を破するところの論文一卷すら書いてはいない（註五）。日蓮が論文をもつてするならば、諸宗もすべからくまず論文を幕府にささげてこれを堂々論破すべきではないか。ところが、金のはいる蒙古退散の御祈禱はわんさと引き受けても、学問をもつて立正安国論を破す論文は一向に幕府に提出されていない。なんと諸宗の僧侶のずるさがこれでもつてわかるではないか。

しかも、日蓮法師が正式に公場での問答を申込みば、そろってこれをうまく逃げて、竜ノ口という未曾有の事件に追いこんだのである。

幕府は大聖人を伊豆の伊東に流罪したが、公文書にはなんにもおせていない。竜ノ口の処刑も、佐渡の国への流罪ものせていない。文応元年の安国論献上も、伊豆伊東流罪の弘長元年（一二

六一）も吾妻鏡の存する時代であるが、何処にもおせていない。だがこの事実を疑う官学派の人もない。官学文献尊重の人なら、立正安国論提出、伊豆伊東を消抹するかも知れないが、これは大聖人が御自身で書したものが残っておるので何人も否定ができないのである。

吾妻鏡は従来信用すべきと絶対視されていたが、現在では幕府の手で書かれたから信用が出来ない。むしろ今迄信用されていなかった北条九代記が信用されている。北条九代記には日蓮上人宗門を開くとしてその生涯を記録している。

だが、幕府としては小松原の法難も、伊豆の伊東の配流も、しかも伊東の配流には取調べは一回もなかった。竜ノ口では取調べがあったが、それも大聖人の御自筆の書面によって知ることが出来るので、幕府の公文書には何等の記録もないのである。

幕府は大聖人を見舞うこと、市井の無頼の徒の如くあつたのである。竜ノ口の処刑も、佐渡配流ということも、幕府の記録にのっていない。記録しないということはその人格を全くみとめないということである。

時宗はこれ等のことを考えると、明日なんのくればせあつて大聖人に逢うというのであろうか。口をきくことさえ恥しい話である。蒙古襲来を叫んで国を患うるものが、首の座にすわり、佐渡雪中の生活三か年を送った。蒙古襲来の怨敵退散を祈禱する僧侶は、時宗から莫大な祈禱料をせしめている。この矛盾、これが政治というものだろうか。政治というものは、人民を救うという

仮面を被つて、人民の膏血を吸つておる奴輩の群をいうのだろうか。自分の勢力ののびることを追求めて、正しいことを言う人間を徹底的にいじめぬいて喜んでおる人の群れを政治家といふのだろうか。青年宰相はそれ程腹わたはくさつていかなかった。明日日蓮法師に逢うことが出来るならば、腹の底から話がしてみたいと思つた。

頼綱の考えは時宗とは全く反対であつた。それは、日蓮法師の不思議な予言に対する自分の迷惑をそれとなく打診してみたかつたのである。それは前にもふれた、王と王との争い、太子と太子の争いであつた。これは自分の心中をみぬかれたような予言であつた。平の左衛門頼綱の名は、大聖人の法難の度毎に出てくる姓名であるが、大聖人と殿中で対面以後は、回想の人物として御書には出てくるが、現実の人物としては、この以後はでてこない人物である。事実、頼綱も、大聖人に対しては、徹底的な圧迫者として名を大聖人の伝記中に残したが、殿中においては、今迄のことはすっかり忘れたかの如く、大聖人に対して好意をもつて接しておるのである。

鎌倉の大臣山に夜鳥の啼く声きがきこえて時宗の書院は、ただ灯の油を吸う音のみがきこえておつた。時宗は明日の天下を患れえる思いで、頼綱は天下を伺う下心でもつて大聖人に接しようといふ四月七日の夜だつた。

因みに、法華取要抄における、二つ日の並び出づるは一国に二の国王ならぶる相世、王と王との闘争なり、星の日月を犯すは臣の王を犯すの相なり、明星ならび出づるは太子と太子との諍

論なりとは、大聖人滅後五十七年にして起つた南北朝の斗いの予言、臣の王を犯すは、足利尊氏の後醍醐天皇を攻めて大塔宮を害せしことを指し、太子と太子との争いとは南北両統の争いをさすといわれる。

それは、皇統の中に大覚、持明の二流を生じはじめた端緒は、宛も文永九年に開け、後嵯峨上皇崩御の際、両統更立の遺詔があつたことによる。

そしてこの文永十一年正月には龜山天皇の御隠居に際して、更立の約の如くに持明系たる後深草系を立てずして、大覚系たる自分の皇子に讓位があつたのである。太子と太子と相争う先兆が既にあらわれておつたのを大聖人が看破されていたのであると申上げねばならない。(註六)

(註一) 御伝土代 聖五七八ページ

(註二) 富士年表 上三三二ページ

(註三) 法華取要抄。全集三三三六ページ

(註四) 辻善之助著「日本仏教史」

(註五) 立正安国論を破した論文は今尚出ていない。

(註六) 姉崎博士の「法華経の行者日蓮」

「天下国家を祈るは法華經にあると、即ち天照大神御托宣に曰く、毎日法華四句の文を誦して、百王の皇胤を守るとか、言われて、いずれの宗においても、法華經は尊い經文とされ、拙者も法華經を誦誦しておるが、いずれの個処をさがしても、禪天魔という文字はのせておらぬが、日蓮法師、それを伺いたい」

質問の第一声が放たれた。

文永十二年四月八日、仏生日である（註一）所は鎌倉の殿中、

日蓮大聖人は、佐渡四か年の流罪の生活が赦免となり、しかも、佐渡からの帰途は、行きとは打って變つて、国府国府の役人が三、四百人の同勢をかり出して、危険と思われる場所を嚴重に守護申し上げての鎌倉入りであつた。

今朝、比企谷の大聖人の新しい草庵をでる時、鎌倉中の信徒全部が早朝からつめかけて、大聖人にお祝いの言葉を申し上げたのである。柳営（將軍の営所、幕府、支那漢の將軍細柳陣營の故事より出す）対面ということは、一宗が公許になる前ぶれとみてよい。今日以後、大聖人の門下は晴れて、鎌倉の街中で、南無妙法蓮華經と唱えて、朝夕の勤行をつとめてよいのである。大



聖人門下にとつて、こんな嬉しいことがあるうが、しかも今日は四月八日の仏生日である。お釈迦さまの生れた日であることは勿論だが、大聖人さまの内証を知る弟子及び四条金吾等々は、違つた意味で、胸をふるわし、南無妙法蓮華經と唱えていたのである。

日蓮一人南無妙法蓮華經と唱えたりと、大聖人は言われたではないか、お釈迦さまは南無妙法蓮華經と唱えてはいない。釈尊は法華經誇法の者を治し給わずと言われ、末法の始に妙法蓮華經の五字を流布して、日本国の一切衆生が仏の下種を懷妊かんにんすべき時なりと言われておる。即ち下種の仏法の新しい仏さまが本日生れて、將軍家にゆくのである。仏さまの教が公許されない筈がない。常日頃から大聖人さまは「日蓮は日本国の人の為には賢父なり、聖親なり、導師なり」と言われておる。これこそ下種仏の宣言ではないか。釈尊の仏法がなくなった時という、今がその時代である。鎌倉中をみても街には南無阿弥陀仏の称名の声のみきこえ、寺には阿弥陀仏が飾られ、観音が、薬師が、不動明王が、大日如来が、祭られて、釈迦仏を祭る寺とは一つもない。正しく釈尊の仏法が滅失した証拠である。

白法隱没とはこのことを言うのである。末法は下種の時代で、神力品には、斯人行世間能滅衆生闍とある。斯の人とあつて仏とはない。この人が、衆生の苦悩を救つて下されること、あたかも、日月の如しというのである。大聖人は自ら日蓮と名のられた。明らかなること日月の如し、清きこと蓮華の汚泥に染まざるが如し、日蓮と名のることあに自解仏乘にあらざやと言われ

ておる。

末法における下種の仏とは、日蓮大聖人のことなのである。

されば、四月八日、早朝大聖人の庵室に群集した信徒に向つて大聖人の御言葉があつたのである。

「私は貞応元年の二月十六日に生まれて本年五十三歳であるが、佐渡に流されては、皆さまも、もはやこの日蓮が、鎌倉に帰るとは思わなかつたであろうが、今こうやって、皆様方と話をしておる。まことに今日の存命不思議と思ほしめせとは、このことである。しかも佐渡の赦免状の日付は、文永十一年二月十六日で（註二）あることも不思議である。竜ノ口に命をすてたかと思つたがさはなくて、佐渡においては法門上重大な仕事をしてのけてきた。伊豆、佐渡の配流の生活を思う時、文永十一年の二月十六日、私の生れた二月十六日が私の赦免状の日付である。三度この日蓮は生れ変つたと言っても差しつかえがない。だからその精神をもってここではつきり申し上げるが、日蓮の法門は佐渡以前と佐渡以後とは、仏の爾前教と実教との相違のように心得ていただきたい。」

この言葉をきいた時、庵室の門下一同、感嘆の声でどよめいた。群集の中の四条金吾などは、この言葉に接すると思わず、合掌して大聖人さまこそ下種の仏さまと心にきめて、ひそかに南無妙法蓮華經と唱えるのであつた。

「時宗殿、頼綱殿に面談するのは、この日蓮一人ですから殿中への御見送りは絶対にお断りいたします。勝ち誇った顔で、日蓮が鎌倉の街をゆくと念仏徒に思われては心外です。見送りはなりませんぞ……」

大聖人はめだたぬ従者をつれて、幕府にむかわれた。

幕府は東西の門口は二町半南北は二町、その内には寢殿、対屋たいのや、大御所、小御所、常の御所があり、東西南北に各々の門があり、今日でも東御門みかど、西御門の地名が残っておる程の壮大さで、鎌倉幕府を象徴するにふさわしい質実で豪快ごうかいな建物であった。大聖人はおそれることなくその門に入つていったのである。時に文永十一年の四月の八日であった。

「法華経のいずれのところにも、禪天魔の文字はないと言われますか」

「左様である。ここに拙者法華経の経巻を持参した。禪天魔とあるところをはつきりと示していただく」

なる程、列座の侍の前には、それぞれ机が置かれてあつたが、その侍だけは机の上に経巻らしきものが置かれてあつた。余程の熱心者ともみえ、またことと次第によつては、大聖人をやりこめてやろうという気概がみえた。

「その前におききたいことがあるが、禪の起こりは如何」

「今更、そのようなこと答えるも馬鹿々々しいが、法師が尋ぬるから、これも問答の仕方と心得て答えよう。そもそも禪の起こりは、釈尊滅度の時、金棺より御手みてを出して、迦葉に、教の外に伝える法ありとして、拈華微笑し、迦葉これを見て会得してまた微笑すと……」

「わかり申した。では、御貴殿の机上にある法華経の中の巻の六の第十六、如来寿量品を開けてみられよ、その經典にはなんとあるか、私か読誦してみよう、一切世間の天人及び阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提あむくさんぼだい（註三）を得たりと謂へり。然るに善男子、我れ実に成仏してよりこのかた、無量無辺百千万億那由佉劫なり……」

大聖人の経文を誦する声は、音吐朗々おんととして、殿中一杯に響き渡った。

「この経文をなんと読まれるか、仏自ら仏を得ること無量百千万劫といわれ、方便して涅槃を現じ、常に此の娑婆世界に住して法を説く、我れ常にここに住すれども、諸々の神通力をもつて、顛倒の衆生をして、近かしと雖もしかもみえざらしむと、寿量品の偈にとかれておるではないか、かくの如く法華経の仏は寿命無量常住不滅の仏である。然かるに禪宗の仏とは、先き程、御貴殿が申された如く、釈尊金棺より拈華微笑とは、禪宗の仏とは滅度する仏をみる、これは外道の無の見解の仏である。しかも、御貴殿巻の第七の第二十三品、葉王菩薩本事品というのを開い

てとくと御覽じろ、ひらきましたか、ひらいたら一、二、三、四、一十、十一とめくつて一番最初の行をよく読んで御覽じなさい。「一切の如来の所説、もしくは菩薩の所説、もしくは声聞の所説、諸々の經法の中にもっともこれ第一なり、能く是の經典を受持することあらん者も亦復かくの如し、一切衆生の中において、またこれ第一なり。一切の声聞、辟支仏の中に菩薩これ第一なり。此の經も亦かくの如し、一切の諸々の經法の中において、最もこれ第一なり。仏はこれ諸法の王なるが如く、此の經も亦復是の如し、諸經の中の王なり」と書かれていないか、これを御貴殿は文字通りによんだらよいのである。仏の金言である。我等は仰いで信じたらよいだろう。法華經は「於一切諸經法中、最為第一」と、これ程わかりやすいことはない。しかるに禪家においては、法華經は吐いたるつばき、月をさす指なぞと下しておるではないか、祖師は無用と言いつながら、達磨大師をなんで本尊とするか、經文は指月なりと言つて經の無用を言いつながら、何故に朝夕の所作に真言陀羅尼をよむか、首楞嚴經金剛經圓覺經を誦誦するか、しかも眞の禪の法門を悟る機とは、祖師よりも伝えず、仏よりも伝えず、我として禪の法門を悟るを最もよしとする、法華經には禪天魔の文字なしと雖もこれこそ天魔の所説と言わざるを得ない、御返答いかが……」

四辺を圧する大聖人の言葉に、件の侍は顔を赤くして今迄みていた法華經の經卷を机の上に閉じるだけであつた。

「伝法記という書物にはこうのせてある。達磨大師が唐土にきたって、梁の国に至り、武帝は、朕は広く寺を造り僧侶を養成し、経を写し、仏像をつくる、その功德はどのくらいであろうかと問うた時、達磨は功德なしと答えたという。今鎌倉には建長寺円覚寺寿福寺等があつて、その寄進者の功をたたえておるが、達磨の口をかりてこれを言えは無功德と言ふことであろう……」

この言葉には、殿中の侍一人として表情を加えないものはなかった。佐渡四か年の配流の生活もこの法師にはなんらの影響も感化も与えないで、今叫んでおる言葉の調子は、小町の辻の説法の口調と少しも変ることなく、獅子の吠えるが如きおもかげがあつた。

「なお且つ、只今蒙古襲来はもはや日時の問題となつておるが、何故宋国が亡びたのか、禪宗が興隆して以後宋国は蒙古のために亡びたというこの厳肅な事実を、各々方は忘れておられるのか」

殿中森閑として、咳一つきこえなかった。

「では伺いたい」

これは入道姿の侍が、落ちついた口調で大聖人に尋ねた。

「念仏を唱えると地獄にゆくと、あんたは言うておるそうだが、本当ですか」

「本当です」

「今でも、本当だと本当に思っておるのですか」

静かだが、場内に失笑の聲が起った。

「南無妙法蓮華經をすてて、南無阿弥陀仏と唱えれば、身をもつて命ごいを致しましょうと、竜ノ口の刀の下で言われても、南無妙法蓮華經と唱えたこの日蓮です。今でも、念仏無間と心得ております」

「南無阿弥陀仏と唱える人の方が、日本中殆どですが、それでも、念仏は地獄行きと申されますか」

「今は日本中の殆どの人が、弥陀念仏をこととしておりますが、仏教を習うものは時と言うことを知らねばなりません。今はともかく今後は称名念仏の愚を悟つて、日本国一同に南無妙法蓮華經と唱える時がまいります。今大勢の人々がそうだからといって、是とすることは出来ません。南無妙法蓮華經はこの日蓮が、ただ一人唱え始めたものであります」

「では、お手前の発明だなあ」

入道姿の侍は、あざ笑うように大聖人を眺めるのであった。

「発明のお宗旨も自讃毀他しなければ、お上からお咎めもないのだが、念仏無間はどうも合点がゆかない、私も御覽の通り入道姿、家には立派な仏壇をこしらえ、隙さえあれば弥陀の名号を唱

えてあけておる老いの身だが、これが、地獄行きと言われたのでは、往生がしかねるとい  
もの……」

「焙烙千枚ならべましても、金槌一丁あればこつぱ微塵であるように、南無阿弥陀仏と妙法蓮華  
経とはことなります」

「どちらが、金槌で、どつちが焙烙じゃ」

「南無妙法蓮華経が、金槌でございます」

「無礼もの！」

入道はみるみる頭のとつぺんまで真赤になって、思わず小刀の柄に手をかけたが、背後の者か  
らその腕を抑えられ、大聖人を睨みつけるだけだったが、やがて真赤な頭のとつぺんから湯気が  
ほかほか登り始めたので、ゆで章魚だこ一丁あがりといった光景に、殿中の侍は思わず笑いを抑えね  
ばならなかった。

みるにみかねて、若い侍が、老人に代つての質問だった。

「年老りの心中も察せず、よくも申した、では念仏無間という世に七不思議な御法話を拝聴した  
いものだ」

「されば、耳をすませて、とくときかれない。念仏は無間地獄、阿弥陀経は読むべからずと申す  
ことも、日蓮の言葉ではございませぬぞ。それは阿弥陀仏という仏様が如何なる仏さまかを知



れば分かること、阿弥陀仏とは、釈迦如来五十余年の説法の内、さき四十余年の内の阿弥陀経等の三部経の中に説かれておる仏であります。この我々のすんでおる世界に生れてきた仏さまでないことを忘れてはなりませんぞ。処が、釈尊は法華経を説く時に、その序分である無量義経という経典において「善男子、我れ先に道場菩提樹下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。仏眼をもつて一切の諸法を觀ずるに宣説すべからず、所以はいかん。諸の衆生の性欲不同なることを知り、性欲不同なれば種々に法を説き、種々の法を説くこと方便力をもつてす。四十余年には、未だ真実を顯わさず、是の故に衆生の得度差別して、すみやかに無上菩提を成ずることを得ず」と言われて、四十余年に渡つてとかれた、一切の経々を唯の一言で否定されてしまい、正宗たる法華経の第一巻において、「世尊法久後要當説真実、正直捨方便但説無上道」（註四）と言われたことは闇夜に大月輪の出現し、大塔をたてて後足代を切り捨てたるが如きものであります。しかるに、この法華経の文、顯然なるにもかかわらず、浄土宗の法然は、念仏に対して法華経を捨閉闍しゃへいかくほう（註五）とよみ、善導は（註六）法華経を雜行と名づけ、あまつさへ千中無一といつて、法華経を千人信ずるとも一人の得度者もないと書物に書いておる。処が、法華経第二に、もし人信ぜずしてこの法華経を毀誇せばその人、命終して阿鼻獄に入らん。また同第七の卷不輕品に、千劫阿鼻地獄に於いて大苦惱を受くとある。これをもつてみると、念仏を唱えることは法華経を謗することであるから念仏は墮地獄の根源と云うになんの不

思議があるのか……」

殿中にはうめくような声がして返答するものは一人もおらなかった。

「往生をするには、なにをもつて往生するかと言えば、法華経の力がなくて往生はできないのである。往生と言えば阿弥陀仏の極楽浄土しか、各々方は御存知ないと思うが、実は、阿闍あしやく仏の妙楽浄土、大日如来の密厳浄土、弥勒の兜率天、香積仏の香積浄土、文珠の離塵垢心浄土、薬師如来の淨瑠璃世界、舍利弗の離垢、迦葉の光徳、日蓮の意樂、須菩提の宝生等々浄土はいくらでもあるが、これらの浄土の考え方は、法華経にとくところの釈迦仏が、仮りに説いたところの浄土であつて、我等にとつて、直接の浄土とは、法華経の寿命品に明かされている、我れ常にこの娑婆世界にあつて説法教化すというのであつて、娑婆即寂光土の教義が打ちたてられるのである。各々方の坐わられておる、この土地こそ、各々方が、今日殿中にこられるためにふんできた大地こそ実は浄土であつて、東西南北いずれのところにも浄土はないのである」

「律国賊とは、天子將軍をも恐れぬ方言と心得るがどうじや、即ち今鎌倉中において諸民が、生き仏と仰ぎ奉る良觀上人は、そのなすことが、日蓮法師、貴僧の如く、口さばきばかりの空理空論ではないぞ、即ち飯島の津にて、六浦むつらの関米せきまいをとつては諸国の道を作り、七道に木戸をかまえ

ては人別の錢をとり、その錢にて、諸河に橋を渡す、橋をかけること百八十九所、道路の修理七十一所、さらに井戸をほること三十三所（註七）と、またその良觀上人の師匠たる叡尊上人は、弘長二年の二月二十七日、鎌倉にきたり、お上の御母君（時宗の母のこと）もまた故最明寺入道殿（時頼將軍時宗の父）も、ともども授戒をされた戒師である。その叡尊上人は、文永元年には、異国襲来の噂をきいて、八月六日に天王寺の金堂に於いて百座の仁王会（註八）を行い、五年正月には蒙古の牒状が到来したのでその難をはらわんがために再び天王寺に於いて修法し、昨年（文永十年のこと）の二月には後宇多天皇の勅を奉じて、大神宮に参籠して大般若経を転読しておるではないか、日蓮法師、蒙古退治は貴僧の専売特許ではないぞ、少しは遠慮し口をつつしんで貰いたい」

一 氣にまくしたてたのは中年の侍である。

「……これらの尊い上人がたの御祈禱もなんら利谷がないと申すのか、勅命を奉じて蒙古退散の修法をなす尊い上人の御祈禱がきかないと申すのか、叡尊律師は国師と呼ばれる尊いお方を国賊と言われるのか、返答を承け給わりたい」

一 膝のり出している質問であった。大聖人は思わずにつこりされて返答をした。併し御簾内の執権職時宗を始め、頼綱以下の同座の武士たちは、この大聖人の莞爾たる微笑に万感の畏敬を感じたことは勿論であった。

「御貴殿は、只今、良観上人、叡尊上人のことを申されたが、仏教の比較は人を規準として話をなされてはならない。即ち人が敬うから尊いというのではなく、その御方が如何なる法に帰依しておるかを標準にして、即ちその依る所の經典をもつて、比較対照せねばなりません。これを依法不依人、法によつて、人によらざれと言うのであります。先ず修法された仁王経や大般若経という経は如何なる経かを考えねばなりません。法華経の寿量品に、樂於小法徳薄垢重者と申す句があります、天台大師は、この小法と言うのは、華嚴経般若経、仁王経等々の法華経以前の経を指し、これらの小乗の経々を依経とする宗旨の人は、徳もうすく、垢というのは煩惱というところとでございますから、垢重、即ち煩惱欲も強いということをおるのです。きく所によりますと、昔の戒律を守られた聖者は殺といつて草木をきるという言葉や、収と言つて金錢をたくわえるという言葉すらいみきらい、行雲廻雪（美人の形容詞）には死屍の想いをなしたと申しますが、只今の律僧達の振舞をみますと。御祈禱料をたくわえて、利錢借請（金融業）を業とし、布絹財宝に執着しております。次に道をつくり、橋を渡すことは、逆に諸人の歎きになっておることを知らないのですか。六浦の関を飯島の津でとる、国々に構えた関所も旅人の煩いとなつておることはまだこの座中の方々のお耳に達しておらぬとでも申すのですか」

大聖人のあたりをはばからぬ強言に座中は嵐を呼ぶように、急にざわざわとさわぎたつた。

(註一) 积尊の誕生日

(註二) 赦免状二通あり、前号のは二月十四日

日蓮法師御勘気ノ事御免許アルノ由仰セ下サルル所也、早赦セラルベキ由二候也。仍テ  
執達件ノ如シ

文永十一年二月十六日 兵部丞行兼

山城兵衛入道殿

(註三) 仏智のこと。

(註四) 方便品

(註五) 法華経を雑行の中にいれて否定する。

(註六) 善導(六一三—六八一)支那の僧で、浄土五祖の第三、真宗七祖の第五とされる。

(註七) 富士巻の(三)の七三ページ詳説す。

(註八) 天下泰平鎮護国家を祈願するため仁王般若経を講讚する法会

二二

騒然たる殿中をしずめる声がした。

それは平左衛門尉頼綱が、口をきつたからである。

「御坊は法華経以外の仏説はみとめぬというのが本当であるか……」

「それが、釈尊の御言葉ですから、日蓮も従わざるを得ません……」

「そんな馬鹿なことがあるものか……」

頼綱はにがにがしく言い放った。

大聖人は静かに話をつづけた。

頼綱がどう思うとかまわわぬといった様子である。

「釈尊がこの世に出でて、説法をなさった目的は法華経を説くのが、出世の本懐であられたが、聞く所の衆生の機縁（註一）万差であるが故に、三十七日間いろいろと考えられ、四十余年の間、機縁をととのえて、最後にこの妙法を説き給うたのであります。即ち経文には始めよりこの妙法を説かんとおぼしめしたが、仏法の気分もない衆生は、信じないで却って、妙法を誇るであろう。故に機をば、ととのえようと思われて、初めに華嚴、阿含、方等、般若等の経を四十余年の間と、最後に法華経を説き給うた。法華経の始めに無量義経という経文があるが、その経で、釈尊は、四十余年にはいまだ真実を顕わさず、とはつきり断言せられた。これは譬えば、大王の行幸の御時、將軍が前進して狼籍者を取りしずむるようなものであり、將軍が大王に敵する者を大弓を以て射はらい、また太刀をもって切りすてるが如きもので華嚴経をよむ、華嚴宗、阿含経の律

僧、觀經の念仏者、大日經の真言師等々の者どもが、法華經にしたがわぬを、やめなびかす利劍の勅宣であります。即ち釈尊自身が、法華經以外を仏説とはみとめず、權教（註二）だといわれておるのであって、日蓮が自作ではありません」

一座はしんとして、誰亀口をひらくものがいなかった。平左衛門尉頼綱も、もはや、大聖人にたいして、質問をする氣力もうせてしまった。頼綱は御簾内に、眼をやるとなんらかの合図を内示されたらしく、今度は威儀を正して大聖人に向つて問いを發した。

「御坊、蒙古国の襲来は何時頃であろうか」

殿中は、大聖人の言葉いかにと、全く静まり返つた。

「されば、經文には、何時の何日とはしるされてはおりませんが、……」

大聖人は、ここで言葉をきると、

「今年は一定でありますよう」

この言葉に、静肅たつた場内が、再び大波の動くが如く騒然としたのである。誰かがしゃべる、ひそひそ話が、つきかさなつて、大きな形容の出来ない話し声になつて殿中の空氣を動かすのであつた。

「蒙古国の我が国に国書いたすこと、既に四度におよんでおりますが、御承知の通りわれからは、正式の返答は一切しておりません。さぞかし、蒙古はその間に、我が国状を国書にことよせ

て充分にさぐり、この五か年間に万全の軍備をなし、今年こそは、我が日本に攻めきたるのが、当然と考えます」

「蒙古国の来襲は必然と言かかるか……」

嘆声のこもった頼綱の声であった。

「日蓮はすでに文永五年の八月二十一日、申状を以つて、蒙古国の我国を攻めんこと必定なりと申し上げております。文応元年に、立正安国論を献上して本年は、正しく十五年になります。立正安国論を御採用にならなかつた結果が、今日の蒙古襲来という経文の如くなつたのであります。日蓮が智慧をもつて之れを予言したのではなく、法華経の神文が、日蓮をして言わしめたのであります」

「御坊は、念仏宗や禅宗に我々が帰依しておるから、蒙古襲来と言われたが、今もつて、その考えに変わりはないのか」

頼綱の質問である。

「変りようのありよう筈がございません。日本の国状が、日蓮が十五年前に予言した立正安国論の論旨と符合しておるの時に、所信をますます深くかためることはあつても、変改するなぞ毛頭ございません」

「だが、御坊、国難の来たることを必然と言われる今日だ。念仏宗も禅宗も律宗も、各々その立



場立場をことにするが、国を思い国を患うるの情においては誰人も変わりが無いと思う。じゃによつて、各宗各派が、力を合せて、敵国降伏を祈るのが本当ではなからうか、どう、御返答は……」

「日蓮一人彼の蒙古国を調伏すべきの人たるべしと兼て知つて、立正安国論を勸え申して之れを献策し、そのため却つて、佐渡配流四か年の生活をすごし、今は立正安国論の予冒の通り、国状が変化したので、赦るされて、この殿中に召された日蓮であります。御貴殿の御言葉に従つたものでは、立正安国論の主旨にも反し、今日、この殿中にきた、日蓮の所信にも反することになりま  
す」

大聖人は頼綱の質問を待たず、更に言葉をつづけた。

「立正安国論は、汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ、然れば則ち三界は皆仏国なり仏国それおとろえんや、十方は悉く宝土なり、宝土なんぞやぶれんや、国に衰微すいびなく土に破壊はえなくんば、身はこれ安全にして、心は是れ禪定ならん。この詞ことばこの言信ことばすべく崇むべし、と結んでおるが、実乗の一善とは、二もなく三もない、ただ一の法華経に帰せよと言うことであります。国難を前にして人心を一の所に、あつめてこそ、この日本国は安泰となり、祈りも適う

ものと思うものであります」

「然かし御坊、御説ごもつともなれば、幕府においては、上は伊勢大廟から下は辺土の末社ならびに、念仏、禪、律宗の各々に莫大な祈禱料を投じて、敵国降伏の御祈禱を依頼しておるのが現実だ、それをさしとどめて、御坊、日蓮法師一人のみに祈禱をたのむということは、政治をとるものとしては、どうしても無理なことだ。どうじやろう、諸宗と共に、国難の前には一身のことを考えず、敵国降伏の祈禱をして下さらないか、如何なもんか御坊、実は執権職におかれても、西の御門（幕府は東西南北に門があつた）の東郷入道の屋形の跡に、坊宇を建立して御坊に寄進し、自らも帰依せられたいとの内意があるのだが……如何なものであろうか……」（註三）

執権職時宗帰依との頼綱の声に、満場啞然たるものがあつた。流罪になつた者が赦るされて、殿中に招かれることが未曾有のことなのに、今また意外も意外、時の執権職が堂宇を建立して自らも帰依しようとのことが、北条家の執事たる頼綱の口から出たのであるから、満場啞然としたのも無理はない。このことが、先きに知れていたら、誰れも、大聖人に対して、念仏はどうじや、禪はどうじやと、責めるのは無駄なことであつたのだ。そんなことを責めた四、五人の人は、今は顔色もなくただうなだれて、皆の影にかくれるように身を低くするのみであつた。

大聖人は、時宗帰依の言葉をきいても喜びの色は少しもみせなかつた。

「王地に生れたれば、身を随えたとまつるようなれど、心は随えたとまつることは出来ません。

この日蓮は仏法を以つて本となす覚悟は建長五年四月二十八日の朝より変りはございませんが、王法には常に従いました。伊豆の伊東にゆけとの御命を頂けば、伊東に参りました。竜ノ口の首の座に坐われと言われれば坐りました。佐渡の御流罪右謹んでお受けいたして、雪中に四か年の生活を送りました。だが然し、今日は違います。佐渡の流罪が御赦免になったことは、日蓮の常日頃の折伏が、少しはみとめられたものと考えて、今日、この殿中に参上したのであります」

「…だからこそ、先刻申したように、東郷入道の屋形の跡に一字を建立して……」  
頼綱が口をはさんだ。

「諸宗の僧侶と共々に御祈禱せよとのことでございましょうが、それは断じてなりません。これは王法のことではなく、仏法のことであるからであります。蒙古襲来を防ぐには、日本国の念仏者と禅と律僧等が、頸をきつて、由比の浜にかくべしと先年いっせや申上げた心持にはいささかも変りはありません。日蓮は常に念仏師と禅と律を攻撃すると、各位はお思いかも知れませんが、これらの宗旨は物のかずではございません。真言宗と申す宗旨が、日本国の大なる呪咀の悪法であります。大蒙古国を調伏することは、絶対に真言師に仰せつけてはなりません」

頼綱は皮肉な色を現わして口をはさんだ。

「御坊はたしか、真言宗の干光山清澄寺で出家したのではなかったか、その御坊が真言宗の悪口をなさるとは、ちと解しかねるが、如何がなものであろう」

「恩をすてて無為に入る、真実の報恩と申すなりと經典にあります。比干は王に随わずして忠臣孝人となり、悉多太子は浄飯王にそむいて三界第一の孝となり給うがこれであります。人王八十一代の安徳天皇は、源の頼朝にせめられて海中のいろくづ（魚族）の食となり給う、八十二代隱岐の法皇八十三代阿波の院、八十四代佐渡の院は、鎌倉の右大将の家人、義時にせめさせられ給う。何故に、安徳と隱岐と、阿波佐渡の王は、相伝の所従にせめられて、或いは殺され、或いは島に放たれ、或いは鬼となり、或いは大地獄に墜ちたのでありましょうか。殿中の各々の方とくつと御聞き下さい。隱岐の法皇は天子ですぞ。義時殿は民ですぞ。子の親をあだむことを天照大神が御受納ありましょうか。所従（家来）が主君を敵とすることを正八幡が、御用いあるでしようか。何故公卿が負けたのでありましょうか、只事ではありません。これは弘法大師の邪義、慈覺大師智証大師の僻見をまことと思つて、叡山、東寺、円城寺の人々の鎌倉をにくみ、真言により御祈禱を修したが故に、「還著於本人」とてその失がかえつて公家は負けたのであり、武家はそのことを知らない故、調伏をしなかつた故に勝つたのであります。（註四）日蓮は幼少の頃より、これに疑問をもつたが故に、顕密二道ならびに諸宗の一切の經を習つて十四か年ついに、南無妙法蓮華經と誰も唱えぬ妙法を、日蓮一人唱え始めたのであります。南無妙法蓮華經と唱えぬものと同席せよとは、どうしても承知しかねるお話しであります……」

殿中に權威も富貴もみとめぬ大聖人の断言であつた。

(註一) 機縁―衆生の根性や因縁のことを指す。

(註二) 衆生の機縁をととのえるかりの教

(註三) 日蓮正宗の三代の御法主日道上人の御伝土代による。最古の大聖人の伝記

(註四) 承久の乱をさす。

